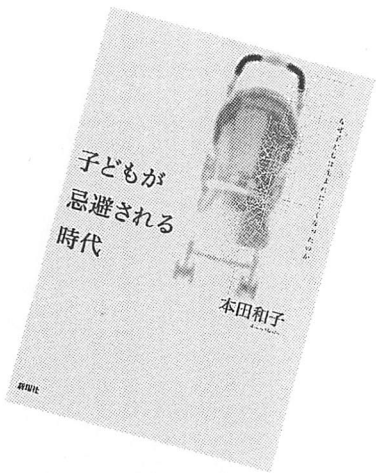


「子ども嫌い」の社会が形成されたのは何故か

損得やリスクの観点から
割に合わないものになった産み育てること

赤川 学

「グローバル・子育てフリーライダー論」は 先進国から発展途上国への 支援の論理としては冗長だと考える



江戸末期から明治初期にか

けて、日本は「子ども天国」として西欧の人々を驚嘆させた。しかるに現在、少子化の背景にあるのは「子ども忌避の心性」だと著者はみる。子どもの存在を心の深層で忌避し、子どもを産み育てにくい「子ども嫌い」の社会が形成されたのはなぜか。この問いに、子ども論の大家である著者は以下のように応答する。

明治民法下で強化された家制度のもとで、子どもは家の継承（ひいては国家の継承）という観点から存在意義を認められていた。やがて近代家族の出現とともに、子どもは「天婦の愛の結晶」、夫婦（特に女性）による選択の対象と位置づけ直される。こうした中、子どもの公的存在意義は薄れ、子育ての負担が夫婦と

りわけ妻にのみしかかる。さらに産業構造と労働市場の変化によって女性能力が活用されるようになると、費用対効果の観点から、子どもの存在を非効率とみなし、子育てを「損な仕事」とかりすく

とみなす若者が出現するようになる。著者は、こうした子ども忌避の心性の結果として生じる少子化を、ロマンス革命を経験した先進諸国に共通する現象とみなしている。それは男女共同参画やワークライフバランスが進んでないから、少子化に歯止めがかからない」となると論じる言説よりは、逆に透徹した社会科学者の認識といえる。

ただし出産や子育ての負担は、過去とくらべれば大きく減じている。とすれば、産み育てることが損得やリスクの観点から割に合わないものになったのは、それらが本当に苦勞やリスクが多いからというよりは、むしろ出産や育児に対する期待水準が一貫して向上してきたからだと考えてよいだろう。

著者が多くを依拠するフェミニズムや女性史もまた、「母性神話」や「愛情神話」を批判しつつも、他方で、よりよい恋愛や結婚や出産や育児やワークライフバランスを求め続ける女性たちを生み出すことに一役買ったように評

者には思われる。そうした事態への言及が少ないのが惜しい。

もっとも著者は終章において、子どもに新たな公共的価値を付与せんと試みる。ここが本書最大の読みどころであり、議論を喚起するポイントでもある。それによれば、子どもはもはや「家の継承者」でも「夫婦の愛の結晶」でもなく、人間という「種の保存と存続」と「文化の継承者」という価値を付与される。

それゆえ少子化の趨勢もその種の存続に貢献できない北半球（先進諸国）の人間は、種の存続という公共的な役割を担う南半球（発展途上国）の人々に対し、「人として負うべき当然の義務」として、私的・公的に支援すべきとされる。また他の文化圏で産まれた子どもが養子として別の文化圏で育てられることで、その文化を継承していく可能性も期待できるといふ。そのとき国境は消滅するらしい。

後者（養子による文化の継承）は、それなりにありうる選択の一つではある。しかし「種の存続」に貢献しない先進諸国が、それに貢献する発展途上国に「当然の義務」として支援すべきという論理には、いかに賛成しがたい。

著者が自覚しているかどうかは不明だが、この理屈のもとでは、子どもはグローバルなレベルでの「公共財」と捉えられる。いわば「グローバル子育てフリーライダー論」である。

それは公共財供出に関する理論の常として、公共財を拠出しない者（つまり子どもを立派に産み育てない者（子育てフリーライダー）から、子どもを立派に産み育てる者への、サンクション（ないし義務）としての財の移動を正当化する論理へと、容易に転化していく。本書の主張も、すでにそのようなものになっている。

しかし評者は、先進国から発展途上国への支援は、ジョン・ロールズの「格差原理」やアマルティア・センの「潜在能力の平等」の原理に基づいて正当化されるべきであり、「グローバル・子育てフリーライダー論」は支援の論理としては冗長だと考える。

著者が構想する通り、国境が消滅するかどうかは不明だが、少なくともグローバルなレベルでの子育てフリーライダー論の世界が完成した時点では、新たな境界が、子どもを立派に産み育てる者と、立派に産み育てない者とのあいだに引き直されることになるだろう。そのような世界に、少なくとも評者は住みたいとは思わない。

いずれにしても本書のような主張が、フェミニズムや女性史の知見を自家薬籠中のものとしてきた著者から提案されるどころに、時代の趨勢を読み解くことはできるかもしれない。その意味では、興味深い書ではある。